

先生の御遺志はもとより一事業会社の消長にはなかつたのであります。遙かに高く先生は我国凡ての幼児の幸福を、然りまことにそのみを念じておられたのであります。

我々に残された責務は今日の悲しみを超えて明日の日本の幼児の幸福を培い育てることにある筈であります。そのみが先生の御遺志を真に生かし切る唯一の路であることを確信して居ります。

先生は永遠に我々の視界から去られました。しかし先生の御遺志はフレール館全社員の中に生きて脈々と波

打つて居ります。

先生の御名の呼ばれる限り、先生の御遺志は不滅であります。不朽であります。世代を超え、時代を超え、永遠に生くべきは申すまでもありません。

私はそれを確信し、又その実現のために今後身命を擲つて悔いしない決意を誓わして頂きます。

倉橋先生、どうぞ静に平安に御眠りになつて下さい。
昭和三十年四月二十四日 株式会社 フレール館

代表取締役 小高龍治

故倉橋惣三先生略歴

(次男倉橋文雄氏の草稿による)

倉橋惣三は明治十五年十二月二十八日、故倉橋政直、同とくの長男として静岡県鷹匠町に生れ、東京府立第一中学校、第一高等学校文科、大学哲学科を卒業し、児童心理学、幼児教育学を研究、明治四十三年、東京女子高等師範学校講師を嘱託され、大正六年、同校教授となり、爾来前後約二十五年に亘つて附属幼稚園主事をつとめ、又その間三年間は附属高等女学校主事の職にあつた。その間大正八年から十一年まで文部省在外研究員として欧米各国に派遣された。又、明治四十四年頃より日本幼稚園協会の主幹として、機関誌「幼児の教育」の編集にあつた。他、昭和二十三年、日本保育学会の発足以来、会長をつとめ、恩賜財団母子愛育会、日本児童学会役員に地位にもあつた。又、大正七、八年頃から雑誌「コドモノクニ」、昭和二、三年以来雑誌「キンダーブック」の編集顧問となり、幼児雑誌のために微力をいたした。この間、昭和初年以來、前後十数回に亘り、時に兩陛下、時に皇后陛下に児童心理および、幼児教育につき御進講申し上げ、昭和十二、三年頃兩三年に亘り、ほぼ毎週皇太子殿下のお遊び相手を申上げた。又、昭和四年から同二十一年まで文部省社会教育官を兼任し、成人教育の指導にあづかり、中央社会事業協会その他の団体にも関係し、社会教育、社会事業の発展にもあづかつた。さらに、この間「幼稚園雑草」「幼稚園保育法真諦」「育ての心」「フレール」「子供讃歌」新庄氏との共著「日本幼稚園史」を著した。

家庭人としては、明治四十五年三月、内田トクと結婚し、長男正雄、次男文雄、長女直子の三児をもうけた。

昭和二十八年秋以來、循環障害の気味あり、治療につとめた結果、経過頗る良好であつたが、昭和三十年四月二十一日、脳血栓となつて、にわかにな病状革り、同日午後三時五十分永眠した。行年満七十二。